「日本絵画のなかの兎：図柄の博物誌」あいだのすみっこ不定期漫遊連載第78回『あいだ』180号　2011年2月20日 19-24頁

あいだ 180

発行＝『あいだ』の会　　月刊　2011年2月20日発行　1部360円

栃木県日光市　photo. Akiba Sari

あいだ180号　目次

断想　藤枝 晃雄　……2
《書評》潔癖な執念――大谷芳久『藤牧義夫眞僞』を読む　光田 由里　……8
《展評》人のリアリズムを笑うな――「アジアのリアリズム」展を見て　足立 元　……11
《連載エッセイ》「日本の表現主義」展 (8)　美術館活動の意味と今後　森 仁史　……15
あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第78回　日本絵画のなかの兎――図柄の博物誌　稲賀 繁美　……19
《連載》戦時下日本の美術家たち (44)　美術の国防国家 情報官・鈴木庫三　飯野正仁　……25

「日本絵画のなかの兎：図柄の博物誌」あいだのすみっこ不定期漫遊連載第78回『あいだ』180号　2011年2月20日 19-24頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第78回

日本絵画のなかの兎——図柄の博物誌

稲賀 繁美（いなが　しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学）

旧暦の新節を迎えるにあたり，今回は趣向を変え，干支にちなんで，兎の図像誌を簡単に振り返りたい。年賀状に頂戴した東亜細亜各国からのさまざまな図像を拝見しての発案である。

鳥獣戯画再訪

日本を代表する絵画作品で兎が描かれたもの，といえば，誰でも思い出すのは国宝《鳥獣戯画》だろう。京都・栂尾は高山寺の鳥羽僧正，覚猷（1053-1140）筆と伝えられる。残存する４巻は，それぞれ筆致が異なり，異なる筆者によるのではないかとも言われる。兎が活躍する甲巻を少しゆっくり眺めてみよう。正式には《鳥獣人物戯画》と称し，鳥獣が人間を模倣した擬人化が特異だが，まず渓流に沐浴するのは，兎と猿。猿はもとより人間に酷似するから，よけいに兎たちの人間そこのけの仕草が目立つ。柄杓で水を汲み，猿の背中を流す兎，驢馬に見立てた鹿の背中に跨って川を渡る兎とその御者を演じるお供の兎。さらに流れには猿と向かい合って抜き手を切る遊泳兎や，岩より頭から水に飛び込んで，空中に下半身だけ浮かぶダイビング兎も描かれる。次に舞台が移って，蓮葉を標的に弓矢の射的競技に勤しむ兎と蛙だが，これもなぜか兎が主役で，狐たちは脇役のまま。蛙たちは，自分の番を待ちながら弓矢の調整に余念がない。宴会の準備か，肴を持った櫃を担ぐ兎２羽の後ろには，兎と蛙が酒樽を運んでいる。遅れて馳せ参じたのか，弓矢を肩に

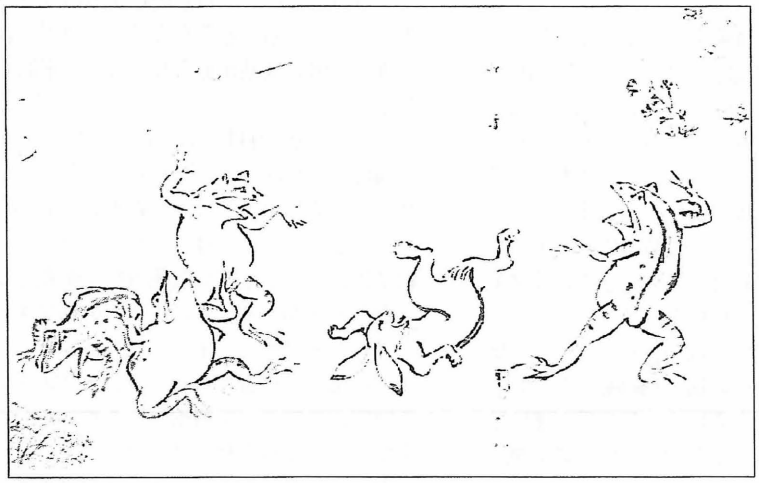

図１《鳥獣戯画》京都国立博物館蔵

疾走する兎と，それを招き寄せようと，口を開いてなにやら叫んでいる兎も見える。後段には蛙と兎の相撲も描かれる［図1］。兎の耳に噛みついて外掛け攻勢を掛け，兎を転がせて勝ち誇り，怪気炎をあげる蛙の図像が有名。教科書で見て以来，日本で教育を受けた者ならば，誰しも無意識のまま記憶している光景だ。そして法会の場面には，黒い冠を被った兎が，一方では数珠をまさぐり，他方ではみるからに寅の毛皮を手にして胡座をかいている。漫画家の手塚治虫はことのほか《鳥獣戯画》を愛し，NHK番組に招かれた折に，即興で図像を再現してみせたが，その折に手塚の絵筆から出現したのも，ほかならぬ，相撲で負かされて転倒するこの兎の姿だった。

陰陽五行説では解けない《鳥獣戯画》

だがそもそもなぜ，兎と蛙が相撲をとっているのだろう。ひとつの仮説としては，嫦娥伝説が思い起こされる。太古，世界には十の太陽があり大地を焼き尽くそうとするので，弓の名人，羿（げい）が九つの太陽を射落とし，西王母から不老不死の仙薬を褒美として授かる。ところがそれを妻の嫦娥が盗み，月に逃げてしまう。西王母の怒りを買った嫦娥は，罰として蟾蜍，つまり「ヒキガエル」に変えられた。だから月にはヒキガエルが棲んでいる，というよく知られた伝説だ。

もちろん月には兎も棲んでいる。日本に存在する遺品では，奈良の中宮寺の国宝《天寿国繍帳》（飛鳥時代）の残欠，左上に刺繍された月の兎が，古い作例として知られる［図2］。円形の月のなかで兎が薬壷あるいは臼を搗く様が描かれている。右手にあるのは，おそらく月の桂の樹木であろう。中宮寺でいまでもお土産に売っている神亀土玲は，ここから絵柄を取っている。ほぼ同時代の作例である法隆寺の《玉虫の厨子》にも，須彌山の図（須彌座絵）の「捨身飼虎」の図柄の上方には，月の兎が密陀絵で描かれている。こちらは，仏陀の前世譚である『ジャータカ』のなかにある「兎王

図2　《天寿国繍帳》（飛鳥時代）の残欠

本生譚」に由来する。ある日キツネ，サルとウサギの住む森に，帝釈天が老夫に姿を変えて現れる。食をもとめる老夫に，キツネは川で捕らえた魚を持参し，サルは木に登って果実をもぎとるが，何も与えることができないウサギは，「どうぞ私を食べてください」と火中に投身自殺を遂げてしまう。その自己犠牲の徳を貴んだ帝釈天が，ウサギを救い，月に蘇らせた，という話だ。こうしてインドではウサギは帝釈天の眷属として遇されてきた。日本では『今昔物語』第5巻13にみえる「三つの獣菩薩路を行じ，兎身を焼けること」。これと仏陀が前世で虎に自身を食物として提供した話とが，法隆寺の「捨身飼虎」では，ひとつに結びついているようだ。これら現存するわずかな作例から見ても，どうやら月のウサギには，仏典と中国の説話が習合した混淆の形跡がある。

そこで話を戻せば，「月中に兎，蟾蜍あり」（『論衡』）というが，そもそもどうしてウサギとカエルが月で棲み分けをしているのか。こじつけといえば，それまでだが，これには，木火土金水の陰陽五行で解釈しようとする説がある。月は「水」の精であるとされ，それゆえ「土」の気を持つヒキガエルによって浸食される。それが月の欠ける原因，つまり「土剋水」。これに対して金蜍玉兎つまりウサギは，「木」の気をもっており，成長を司る。「木剋土」であり，

それで月は再び満ちてくるのだという。そもそも名月の精たるウサギは，月に居るウサギを眺めて妊（はら）み，その年齢は千歳といわれ，瑞兆の動物とされる。「白兎，月の精なり，その寿千歳」（『延喜式』）。だが，実のところ，この説明では《鳥獣戯画》の相撲の場面はうまく説明できない。というのも画面では，カエルがウサギに勝利を収めて怪気炎をあげているのだから。それより右にはカエルが仰向けに倒れていて，どうやらカエル殺し？の下手人らしいサルを，ウサギやカエルが追いかける場面が，さらにその右側に描かれていた。こうなると事態は三つ巴の様相を呈してくる。当時広く知られていたはずの説話や仏説では読み解けないのも，《鳥獣戯画》の面白みだろう。

反復と変奏

そしてこのあたりから《鳥獣戯画》は，いや増しに精彩を帯びる。何事ならん，と後ろを振り返る兎と狐の視線を追って，絵巻を左に開くと，その先に猿を追いかける兎や蛙の姿が見えてくる。なぜ追跡劇なのか，とさらに絵巻を左に繰ると，ようやく追跡の原因が判明する。すなわち，同一の登場人物ならぬ登場獣たちが，時間をずらした姿で，絵巻のなかに巧みに並列されている。

この技法は「異時同図法」などと呼ばれるが，絵巻の展開とともに物語が進展する趣向は，手塚が本格的に着手したアニメ動画の先祖たる名誉を裏切らない。アニメとは反復と変奏のなかに動きを表現する，という手法である。そしてそれは，ひとり紙に筆で描いた絵画にはとどまらない。

実際，韓国や中国と比べて，兎の絵に日本らしい特徴を探すならば，どうだろうか。あるいは漆を塗り重ねた蒔絵に多く兎の意匠が登場することだろうか。江戸時代の作品《波兎蒔絵櫛筐》[図3] には，超自然なまでに長い耳を棚引かせて，波を越えて跳躍する兎が描かれる。筐の周囲を何羽も飛翔しているが，はたしてこれまた「反復と変奏」によって，同一の兎の様々な姿態を連続して写したという趣向だろうか。そうならば，さながらマイブリッジかエティエンヌ・ジュール・マレが19世紀末に試みた実験的連続写真の先取りということなる。画題は『古事記』の因幡の白兎に由来するという。だが謡曲『竹生島』に由来する「波兎」文様の変奏とも見える。こちらは「月海上に浮かんでは，兎も波を趨るか面白の浦の景色や」の章句で知られ，流行を見た。北野天満宮の三光門の唐破風にも《波兎三日月彫刻》(1607) が知られる。豊臣秀頼の寄進となるもので，その由来からは，琵琶湖の竹生島との関連も推察できよう。

だが筆者には，どの図柄が因幡の白兎で，どれが『竹生島』起源なのか，截然と見分けて断定するだけの用意も見識もない。文学的な典拠は，必ずしも作品の理解には裨益しない。さらに二代・米田孫七には《蒔絵猿兎綱引図印籠》が知られる。加賀蒔絵の優品だが，一方の面には猿，他方には兎が配され，たがいに首の後ろに縄を掛けて仰け反り，引っ張り合いの競技を演じている。加賀藩に由来する銘品を多く収める金沢県立美術館には，兎をモチーフとした工藝品が多数収蔵されている。それらを瞥見して思う。《鳥獣戯画》以来，どうやら日本の工匠たちは，猿と兎の取り合わせに魅了され，呪縛されてきた。そして，それを反復しつつも，様々な変奏を試みることで，美術・工芸の歴史を紡いできたようだ，と。

図3 《波兎蒔絵櫛筐》 金沢県立博物館蔵

《鳥獣戯画》は，絵巻物というきわめて横長の画面において，反復と変奏の妙技を見せた。それと同様に横長の画面に兎を配した名品としては，嵯峨の大覚寺・正宸殿の障壁を飾る板絵が，これまた国宝に指定されている。かつては光琳の作とも伝えられたもの。中国や韓国の伝統とは一線を画した装飾性が顕著に認められる。また動物分類の専門家ならばトウホク・ノウサギ，キュウシュウ・ノウサギなどと特定できる，生息地を異にする様々な種類の野生の兎が描き分けられているのも趣深い。群れをなして休息する兎たちのなかで，一番前に居て，後ろ足をだらしなく伸ばし，耳を倒して寝そべる黒い兎が一際目立つ。

俵屋宗達や渡邉始興（1683-1755），円山応挙（1733-1795），19世紀なら岸駒や歌川広重にも兎の名作が知られるが，京都で四条円山派の流れを汲む近代の画家として，文化勲章を受章した竹内栖鳳（1864-1942）にも，《飼われたる猿と兎》（国立近代美術館）［図4］という一対が知られる。猿と兎とを対にする趣向は，ここでもまた，あきらかに《鳥獣戯画》を踏襲している。さらに，群れて休む兎たちの姿態を生き生きと捕らえた筆には，大覚寺の板絵同様に，後ろ足を投げ出して休む兎も描かれている。一番怠惰な格好をしている彼が，画面のなかでは一番偉そうにみえる。栖鳳は猿を三年ほど飼っていたという。この絵には，大覚寺板絵の絵師が示した鋭い観察眼を，現代において引き継ごうとする作者の描写力，敵愾心と自信までもが，透けて見えるようだ。

茶道具のなかの兎の意匠

兎のように飛び跳ねながら，反復と変奏を繰り返す文章となってきた。ここでやや趣向を変えて文様の意匠に注目し，因幡の白兎のように，今度は海を飛び越える現象を取り上げよう。東シナ海の交易のなかで注目された兎の意匠がある。花兎金襴（はなうさぎ・きんらん）［図5］として知られる模様で，桃山時代の京都の豪商，運河の開削でも知られている角倉了以（すみのくら・りょうい:1554-1614）にちなみ，角倉金襴（すみのくら・きんらん）として知られるものもある。金

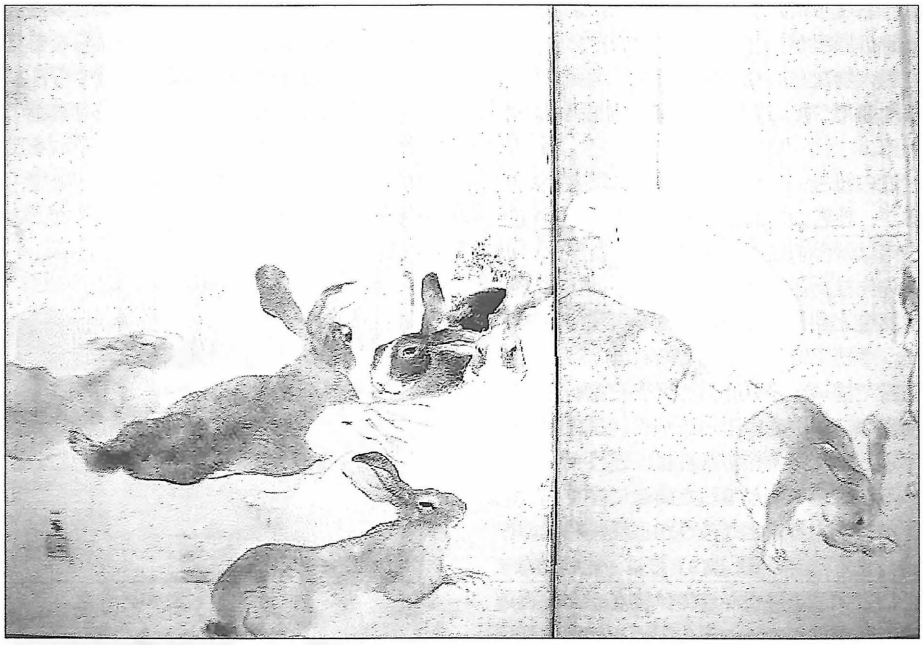

図4 《飼われたる猿と兎》（部分） 竹内栖鳳 1908年 東京国立近代美術館

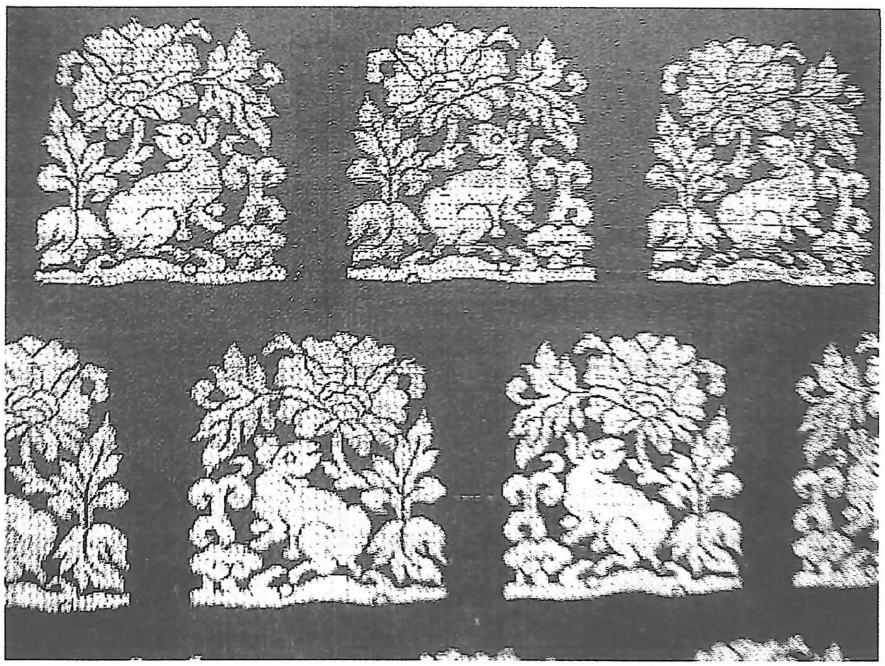

図5《花兎金襴裂》徳川美術館蔵

襴とは平糸に金糸を織り込んで模様を織り上げる技法であり，宋代の中国で発達した。日本には天正年間（1573-1591）に明の織工が堺に伝えたものといわれ，以来，京都の西陣（にしじん）で織られてきた。元来，金襴とは仏教の僧侶が身につける袈裟を金襴衣と呼んだことに由来する。日本に将来された豪華な作例は，大名家や社寺に伝わった。とりわけお茶の世界では，名物裂（めいぶつぎれ）として珍重された。大名物や中興名物など，名物道具とともに伝承され，道具ものの装いに不可欠な「裂地」となっ知 られている。

お茶のお手前では，裂の名前も披露する。花兎金襴は，後ろを振り向く兎に花を配した意匠。大名物「油屋肩衝茶入」（ちゃいれ：抹茶の粉末を入れる器，肩衝「かたつき」とは，容器の肩の部分が張った形状を指す用語），あるいはこれも大名物として知られる「日野肩衝茶入」などが茶席に供される時には，それらの仕服（しふく：茶入れに被せる布袋）に花兎金襴を用いることが通例とされている。角倉金襴のほうは，了以愛玩の品とされ，文様が比較的大柄であるだけに，兎の表情も具体的になっている。前足を片方あげて後ろを振り返り，周囲の様子を窺う兎の動きが捉えられている。こちらは大名物「鎗の鞘肩衝茶入」，中興名物「思河茶入」などの仕服に用いられる。瑞兆としての兎の意匠が重宝されたものだろうか。

花兎金襴，角倉金襴，どちらも地色は紺，文様の花兎は「作土形」（つくりつちかた）と呼ばれる。花樹が根付き，兎が座る土壌をも文様に取り込んだ意匠ゆえの命名だ。ともに横並びに同一パターンの図柄がくり返されるが，縦には一段ごと文様が裏返しにされ，兎の向きも格段ごと，交互に左右反対に配置される。実際にお茶を嗜まない一般人には，なかなか親しみがないだろうが，名物裂には，観照を所望した先人たちが手づからに愛でたという来歴が染みこんでいる。その同じ道具を手に取ることが，いわば先人たちの動作や観照を，身を以て追体

験し，その精神を汲む経験となるのであろう。たしかにそれをfetish 呪物崇拝と呼ぶのは容易かろう。だがそこで人は，道具の物質的な伝授によって先人の魂との交流を絶やすまいとする。そうした継承の意識が，茶席での仕服の拝見を通して，培われる。中国宋代原産の兎の文様は，こうした茶席の嗜みのなかで，いわば茶道具の「衣装」に取り込まれた。これら意匠の兎たちは，松江の藩主であり茶人として著名な松平不昧（まつだいら・ふまい：1751-1818）が著した『古今名物類聚』(1791) などに，名物裂のひとつとして整理・登録され，いまに至るまで珍重され，愛玩されている。

家紋の兎

さて，中国では兎は月を見て子を妊むといわれる。こうした月の兎の寓話ひとつとっても，兎が多産・豊穣の象徴として歓迎されたことが推測できよう。子孫繁栄とくれば，家紋の兎に込められた意味が問われなければなるまい。日本でとりわけ特異な発展を遂げたのが，家紋の兎だろう。正面向きの「兎」(f)，それを丸で囲んだ「丸兎」(a)，その輪が細ければ「細輪に兎」。先にふれた『竹生島』に由来する「波に兎」。それを鬼瓦のようなアーチ型の台形に配し，両側から垂れる花樹のなかに正面向きの兎を置く「花兎」(c)，さらには後ろ足で立ち上がった対の兎を描く「対（むか）い兎」(e) などが，おとなしい部類だろう。

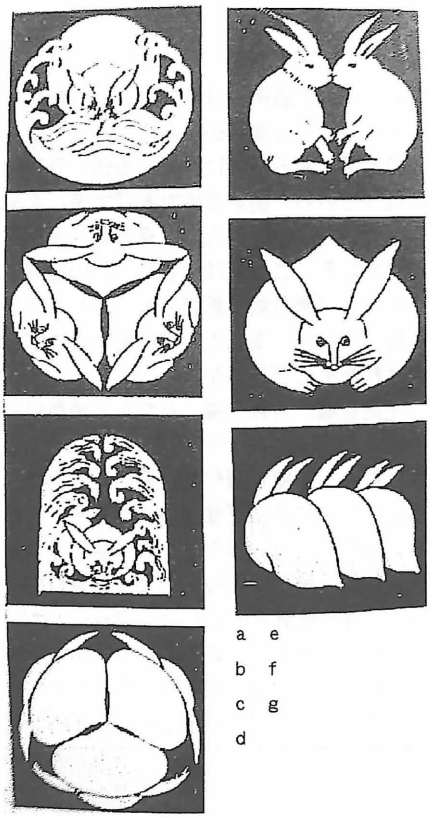

図6 兎意匠の家紋の例

ところがこれに加えて，文様化が著しい家紋も知られている。「三ツ後向き兎」(g) などは，青蓮院大根が，根っこをこちら向きにして，三本交互に並んでいるような案配だ。「三ツ兎」(b) は正面から見た兎を三角形に組み合わせたもので，三羽の兎の耳が逆三角形をなす。さらに極端なのが，「尻合の兎」(d)。蕪の根っこを中心に三つ合わせたような同心円の図柄は，きわめて抽象的で，名前を聞かなければ，とても兎を描いた図柄とは思えない。ここでは三羽の兎の耳が，花びらを包む萼のように，図柄の周囲を結んでおり，遊び心のデザイン感覚が横溢している。はたしてこんな紋様意匠は，儒教社会の韓国・中国でも発展しえたのだろうか。

＊一般に容易に入手できる参考文献若干 ◎文人画研究書『兎百態』日貿出版社，昭和61年。◎スタジオ・ジャポニカ編『百分の一科事典・ウサギ』小学館文庫，1999年。◎淡交社編集部編『茶の裂地入門』淡交社，平成8年。なお本稿は，韓中日比較文化研究所で，中韓日の類似と差異から干支の国際的な比較文化史を提唱する，李御寧先生の編により『十二支：兔』（韓国語訳イ・ヒャンス）として2010年に刊行された原稿の日本語原文。遺漏も多いことを恐れるが，紙幅の関係上，このあたりで打ち止めとした。外国の読者に親しみのない事柄には，いくつかの説明を付加してみたが，識者のご教示を待つ。なお全部が出揃うのに12年かかれば，まだ本連載も12年続く計算だが，そうは問屋が卸すまい。ちなみにすでに『寅』の巻は刊行済み。筆者も参加を要請された『辰』も最近上梓された。

編集雑記

前号（179号）の訂正とお詫び

▲近藤竜男氏による中里斉氏追悼稿で，18ページ本文下から15行目と14行目が誤って入れ替わっていました。正しくは「同時多発テロや広島の原爆をテーマにした作品など，政治・経済・国際情勢への関心が色濃くあらわれている。」となります。不手際をお詫びいたします。

訃報

▲市口清一氏，2010年5月4日逝去。60歳。先頃，ギャラリー現と目黒区美術館区民ギャラリーで有志発起の追悼展がおこなわれた。合掌。

▲中根昭子氏，2010年6月13日逝去。享年70歳。幻想的な作風で知られた。

▲高橋勝氏。2010年7月6日逝去。享年72歳。各種の日韓交流展への出品が多し。合掌。

▲清水誠一氏。2010年12月6日逝去。65歳。本誌の山岸信郎追悼連載では157号にご寄稿いただいた。合掌。

▲以上，最近の物故者の何人か。

▲70年代美術状況の，ある意味で「躁」の側面を体現していたような清水誠一氏で思い出すことをひとつ。

▲東京から故郷・山梨県小淵沢に戻った当座，氏は，半ば強制加入させられた地元消防団の仲間たちに，さんざんイジメられた，とこぼしていました。日頃，陽気にまくしたてて倦まない氏から思いがけない現実を聞き，地方在住の「現代美術家」を，なおもとりまく現実のきびしさに，胸ふさがれる思いでした。

▲身近で訃報がつづきます。いわば，流し灯籠をただ見送っているほかない自分に，いらだちをさえ覚えます。じっさい，当会も，物故者記事に特化した別版を出せれば，と思わないではありません。

「“城ちゃん”ありき」

▲「城ちゃん」とは映画作家・城之内元晴氏。1950年代末，日大映研に所属。61年，ヴァン映画研究所に参加。樺美智子追悼集会で『ドキュメント6・15』を上映。ネオ・ダダやグループ音楽など当時の前衛集団との交流深く，64年にはハイレッドセンター「シェルタープラン」を撮影。69年には，3年ごしにとりくんでいた『WOLS』（音楽＝小杉武久）を完成。74年のパフォーマンス映画に『シンジュクステーション』。ほかに『土方巽』（67年），『ゲバルトピア予告編』『日大大衆団交』（68-69年）など。

▲86年12月10日5時5分ごろ，東京品川新八ツ山橋交差点を横断中，乗用車にはねられて死去。享年51歳だったよし。

▲4半世紀後の今年はじめ，この項の小見出しがメイン・タイトルの『城之内元晴回想文集』が夫人・美稲子氏の手でまとめられました。仲間の平野克己，浅沼直也，川島啓志，足立正生，金井勝，中村義則各氏らが寄稿。A5判，並装，112ページ。定価¥1,200＋税。発行＝七月堂（156-0043　東京都世田谷区松原2-26-6）。

北の原野をかけた夢

▲本誌151号の風倉匠追悼連載に，城之内氏から風倉氏にあてた手紙が再録掲載されています。ヴァン時代から親交のあったふたりは，70年代あたりから＜前後して網走，日高を訪れている＞（浅沼直也，同号）。

▲風倉氏はカフカの処刑機械を網走につくろうとし，城之内氏は＜アイヌ伝承説話の最後の語り部を追って3000フィートを撮った＞のですが，いずれも未完，マボロシに終わりました。

個人映画の収蔵

▲ところで，城之内氏の全作品は，故人と縁のない福岡市総合図書館のフィルムアーカイヴに寄託されているというから意外。この回想録の同館・松本圭二氏の一文によると，ふつう，東京国立近代美術館フィルムセンターのような公的機関では，個人作家の作品などは保存対象にされておらず，しかも，敷居の高い「寄贈」が受けいれられても，所有権の放棄が条件らしい。

▲そういう条件に心情的に引っ掛かった松本氏は，収蔵点数の充実をはかりたい新規参入館側の思惑を背景に，遺族と気長に交渉，所有権を遺族に残したままの「寄託」というかたちで収蔵の同意を得た，とのこと。もちろん，遺族の要請があれば，作品は貸し出されます。

石井鶴三遺品に見つけもの

▲＜……石井鶴三の遺品から，鶴三が挿絵を手がけた作家たちの手紙が多数見つかった。与謝野晶子や尾崎士郎が挿絵を頼む一方，新聞に連載された『大菩薩峠』の著者・中里介山が鶴三の挿絵展開催に反対するなど，手紙から鶴三と作家たちの関係が浮かび上がってくる＞（朝日20110215）。

▲本誌既報のように，一時，寄る辺の危ぶまれた遺品が昨年，信州大学におさまり，さっそくこの朗報。岩部定男さん，よかったですね！（本誌166号の同氏稿「ある美術作家の遺品資料を美術館に寄贈するにあたっての経緯」を参照）。

芦屋市立美術博物館はどこへ

▲けっきょく，同館の指定管理者はもとのAMMに戻ることに。だが，学芸員4名全員が「一斉退職へ」（神戸20110219）。詳報するには，しかし，またもや時間＋スペース切れ。あしからず。

[F／20110226]

●年間定期購読のご案内

年間定期購読をご希望の方は，購読料 5,280円（12号／誌代3,600円+郵送料1,680円）を郵便振替でお振り込み下さい。事務局にご連絡をいただければ専用の振替用紙をお送りいたしますが，郵便局からお振り込みの際は，備え付けの青い振替用紙に，振替口座番号を007900-25128，加入者名を『あいだ』の会とご記入下さい。本誌は，書店でのお取り扱いは致しておりませんので，既刊号をお求めの方も，お手数ですが事務局にご連絡をお願い申し上げます。また，既刊号の目次は，下記のホームページにてご覧いただけます。なお，本誌の用紙は中性紙です。

月刊　『あいだ』180号　　編集＝福住治夫　編集・誌面設計＝穐葉さり　制作管理＝新倉美佳　藤江 民
誌面設計・印刷＝石橋　大　製本＝このあいだ社中

発行＝『あいだ』の会　　〒179-0072　東京都練馬区光が丘2-7-4-1008　Tel/Fax 03-3976-7203
http://gekkan-aida.rgr.jp/　mail address : info@gekkan-aida.rgr.jp